

グローバル社会における民衆宗教

——サンタ・ムエルテを事例に——

井上 大介

本発表はローカルな次元で立ち現れる民衆宗教が、グローバル、ナショナルな次元とどのように結び付くのかという点について、メキシコ・テピート地区で発展するサンタ・ムエルテ信仰を事例に考察したものである。

具体的には、メキシコ・テピート地区に設置されたサンタ・ムエルテ像の祭壇に参拝する信者を対象に、彼(彼女)らが、サンタ・ムエルテ信仰を、グローバル(一部リージョナルを含む)、ナショナル、ローカルという次元においてどのように解釈しているのかという点について、インタビューで得られたデータをもとに分析しその内容を報告した。

その際、グローバルイゼーションを「近代以降顕著となり、九〇年代以降より急激に進行してきた国境を越える人、もの、情報の交流によって推進される個性の普遍主義化と普遍性の個別主義化がグローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな諸次現で顕在化する現象」と定義し、国家―脱国家、グローバル―ローカルといった二元論的枠組みを中心としたグローバルイゼーション論からの脱却を試みた。

一方、民衆宗教に関しては、クリフォード・ギアツの宗教の定義をベースとして、そこに権力や権威といった視点を加え「社会における支配者層とのヘゲモニー的状况による闘争や折衝の中で、様々な機構および戦術的実践を通じて、流動的に構築、再解釈、再生産されてきた、従属階級各集団間に共通の世

界観をイメージさせる、物質、観念、事象と関連した象徴の体系である」と定義し、考察を展開した。

メキシコは新自由主義経済を標榜する中で、特に九〇年代以降は、北米自由貿易協定という地域統合への加入を契機に、法王ヨハネ・パウロ二世訪墨、カトリック優遇政策であったと考えられている憲法改正、バチカンとの国交回復、カトリック教会と強い親和性をもつ国民行動党(PAN)の誕生など、国内における政治と既存のマジョリティ宗教との接近が顕在化した。このような動きはグローバルイゼーションにおける国家的枠組みの強化と考えられよう。一方、関税撤廃を主眼とする自由貿易協定に不満を募らせたサパティスタ国民解放軍の武装蜂起などは、グローバル化におけるローカルな抵抗運動として、国内外の関心を集めた。ここでは、グローバルな通信メディアを通じて、ローカルな主張が世界的世論と結びつき、ナショナルな動向に圧力を加えるといった現象を生じさせもした。

このようなメキシコにおけるグローバル、ナショナル、ローカルな諸相を念頭に、発表では、民衆宗教というテーマに絞り考察を展開した。

結果として、信者には信仰対象であるサンタ・ムエルテをグローバルな言説、ナショナルな言説、ローカルな言説で表象するという傾向が存在する点を指摘し、それらが信仰年数とある程度の相関関係を有していたことを報告した。グローバルな言説では、神の普遍性、「死」の普遍性をベースとした信仰である、といった主張が中心であり、ローカルな言説としては、現在のサンタ・ムエルテ信仰発展の原動力となったテピート地区

の貧困や犯罪というイメージと連動させた解釈が中心であった。他方、ナショナルな言説では、メキシコ文化やアステカ文化、具体的には近年、世界無形文化遺産としてユネスコに登録された「死者の日」や、アステカ文明の「死の神」との関係を示唆する主張が確認できた。カトリックとの関係については、ローカルな主張においてそれらの関係が否定されていたのに対し、ナショナルな言説においては肯定的に、グローバルな言説では、結びつきに関する主張に多様性が存在していた。信仰年数に関しては長い信者ほどよりローカルな主張と結びついていた。今後はそれらの言説が生じる背景をさらに精査していきたい。

日本仏教のアメリカ化の諸相

——加州の浄土真宗と禅宗を比較して——

釋氏 真澄

日本仏教の北米伝道の現場では、「アメリカ化(アメリカ人に定着すること)」という課題に直面しており、それは発表者自身がカナダ開教使として経験をしたことでもある。浄土真宗本願寺派(以下、真宗)北米開教区の創設は、一八九九年サンフランシスコでの日系移民向けの寺院創設に遡る。真宗の特徴は、日本文化との強い結びつきと、家族で参加できる寺院形態である。曹洞宗のアメリカ伝道もまた日系移民に応じる形で、一九二二年ロサンゼルスでの創設に遡る。曹洞宗のアメリカ伝道には二つの流れがある。一つは開教当初からの「日系寺院」であり、もう一つは欧州系仏教徒を中心とした「禅センター」

である。一九五〇年代の禅ブームを経て、六〇年代には日本人指導者が禅センターを設立し、全米に広まった。本稿では、アメリカ合衆国カリフォルニア州の真宗と曹洞宗における、アメリカ化の諸相(教学・行・儀礼・伝道方法・僧侶育成)に関するアンケート調査を行った結果を提示・考察する。調査対象は国際伝道に携わる真宗僧侶四名(日本人一名・日系三世米人二名・欧州系米人一名)、曹洞宗僧侶三名(日本人二名・欧州系米人一名)を無作為に人選し、いくつかのテーマにより自由回答を求めた。以下に回答をまとめる。

・教学のアメリカ化 【真宗】キリスト教との差別化の結果、禅や通仏教から非二元論的な表現を使用し、浄土教的表現からの乖離がある。また教学解説の英訳不足と真宗用語の英訳の難しさという問題も挙げられた。【曹洞宗】アメリカ化された教学が、本来の曹洞宗の「言葉から離れる」というあり方とズレを生じる問題がある。

・行のアメリカ化 【真宗】行為の重要性が問われるアメリカで、真宗では自己の行為はさとりには役に立たず、ただ阿弥陀仏にゆだねることで救われると説くので、馴染まない部分がある。「坐禅」を取り入れ人を集めようという動きがある。【曹洞宗】アメリカで坐禅が急速に普及していく中、行の目的が悟りではなく身心の健康維持やストレスへの対処という目的が見られる。

・儀礼のアメリカ化 【真宗】簡略化と英語化が進んでいるが、儀礼の意味解説を行い、アメリカ独自の儀礼を構築すべきである。【曹洞宗】簡略化と英語化が進んでいる。僧侶が儀礼本来